

ロドリーゴ
アランフェス協奏曲

20世紀スペインを代表する作曲家の一人、ホアキン・ロドリーゴ(1901-1999)は、3歳の時に当時、流行した悪性ジフテリアにかかり失明する。子供の頃にピアノ、ヴァイオリン、作曲を習い始め、その後、パリのエコール・ノルマル音楽院でポール・デュカスに作曲を師事する。作曲はブラユ式点字により楽譜を書いている。

彼は、ギターソロ曲、ギター協奏曲を多々書いており、クラシックギターの普及にも努めた。《アランフェス協奏曲》は、彼の最初のギター協奏曲であり、そして代表作でもある。この作品により作曲家としての名声を築きスペインのみならず国際的にも知名度を上げる。又、ギター協奏曲といえば、「アランフェス」というぐらいに有名な不朽の名作となる。しかしながら、彼自身はピアニストであり、ギターは演奏しない。1939年、ギターリストのレヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサからの助言により、当時スペイン内戦のために戦火を逃れていたパリで作品は書かれた。終戦後、スペインに戻り、翌年1940年にレヒーノ・サインスによりバルセロナで初演され大成功を収めた。また、彼の弟子であるナルシソ・イエペスがデビュー公演で演奏し、イエペスのレパートリーとしても有名となる。更に人気の2楽章は、他楽器への編曲、ポップス、ジャズの編曲も多い。タイトルのアランフェスは、マドリッド南部のアランフェスの地名で、モクレンの芳香、鳥のさえずり、噴水を彼に想起させたアランフェス王宮の広大で美しい庭園に着想を得ている。

作品は、以下の古典的な3楽章形式で書かれている。

1楽章：二長調。ソナタ形式。序奏は、コントラバスの持続低音の上に掻き鳴らされるギターの軽快な和音から始まる。フラメンコギターで使われる和音を連打するラスゲアード奏法が、特徴的なリズムとして多用されている。この冒頭のリズムは2拍子系と3拍子系の混ざったヘミオラと呼ばれ、3小節単位となっている(譜例参照)。スペイン起源のダンスであるファンダンゴのような伝統的なダンスやフラメンコを彷彿させる。その後、オーボエ、ヴァイオリンにより第1主題をギターが受け継ぎ、第2主題はギターにより始まる。

☆譜例



2楽章：口短調。ギターの柔和な響きによる和音のアルペジオ伴奏を伴い、イングリッシュ・ホルンのソロによるスペインの伝統的な宗教歌に由来する哀愁漂うメロディで始まる。メロディは旋法(自然短音階)で書かれおり、エキゾチックで幻想的、更に沈痛さを醸し出している。又、繰り返される音形、装飾音が巧妙にリズムを変容されていくことで、ルバート、フラメンコギターの即興的な演奏のような効果が感じられる。ギターの低音域までパッセージを拡張し、ヴィルトゥオーソ的で瞑想的なカデンツァは、ラスゲアードでクライマックスに達した後、最初のテーマがオーケストラで再現される。

3楽章：二長調。冒頭、ギターソロは口長調で始まり、後ほど、オーケストラにより主調の二長調で同テーマを繰り返す。3/4拍子の後に3回2/4拍子の続く変拍子で、宮廷ダンスやフォークソングのような明朗で単純なメロディがギターとオーケストラで絡み合いながら構築されていく。

作曲=1939年
初演=1940年11月9日 バルセロナ、カタルーニャ音楽堂(レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサの独奏、セザール・メンドーサ・ラサールの指揮/バルセロナ・フィルハーモニー管弦楽団)
楽器編成=ギター独奏、ピッコロ、フルート2(ピッコロ持替1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)